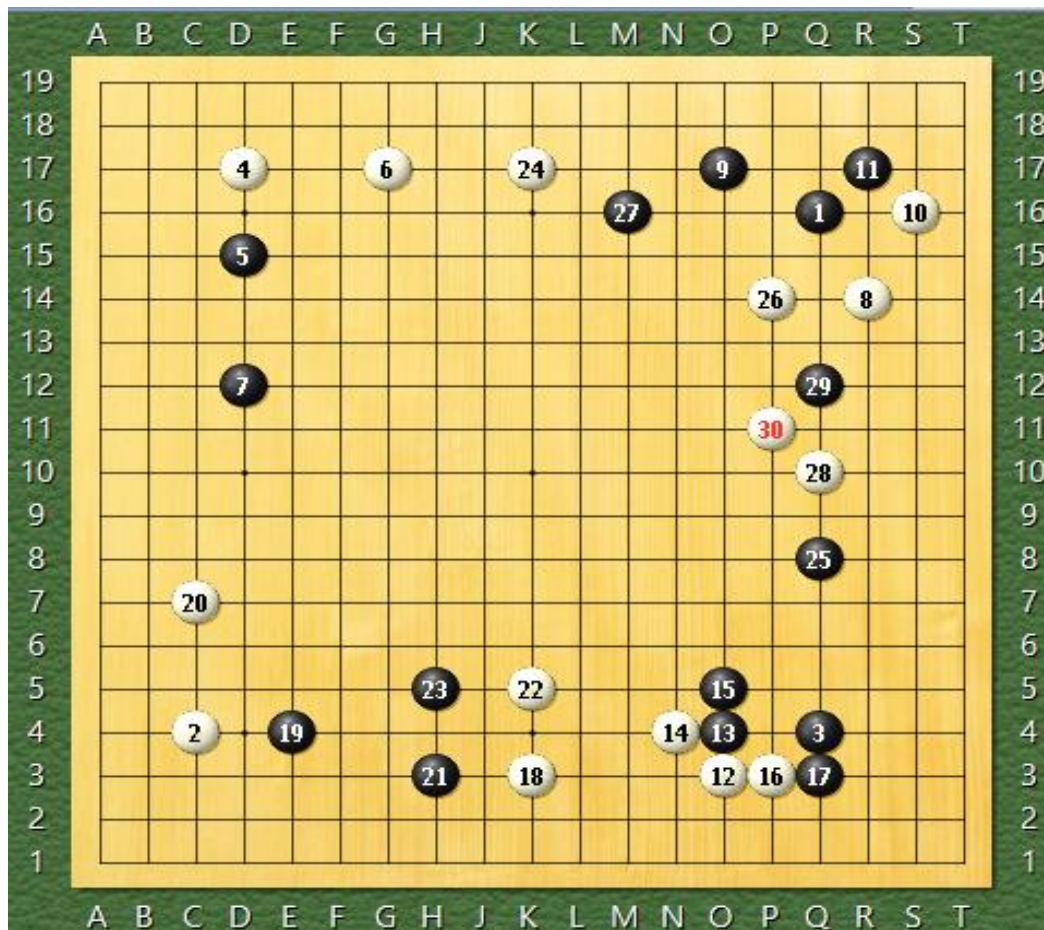


対局譜

互先(6目半コミ) 黒:北村 白:田邊

きよさと夏合宿の最終戦、半ば時間調整で打ち始めた碁だが、思わぬ大石の攻防となり、熱の入った戦いに観戦者も釘付けとなってしまった一戦。夏の思い出に棋譜を残します。老化した頭で再現したので正確な手順でないかも知れませんが、そこはご容赦下さい。(観戦記 苧坂達文)

(1) 黒1～白30

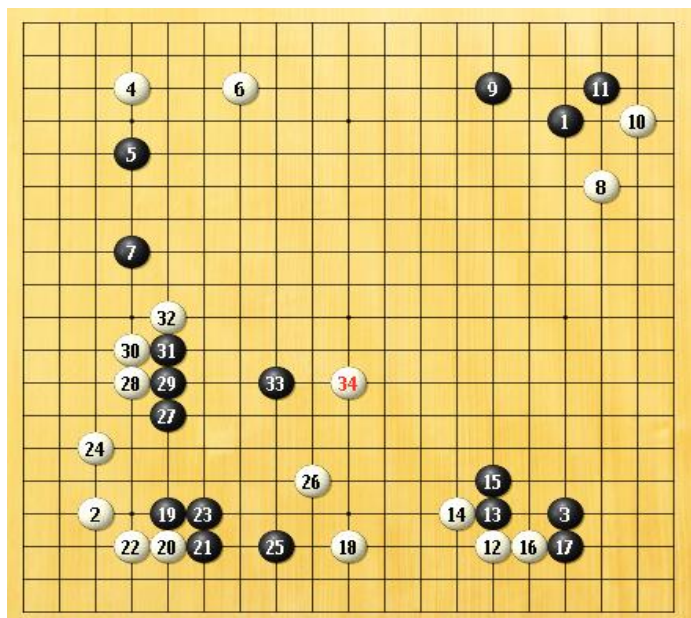


白28まで隅から順次大場を打ち合い5分の立上りとなった。

白20は白18があり、黒が窮屈な場所なので、参考図Aの白20と打ちたい。

参考図A(白20～白34)

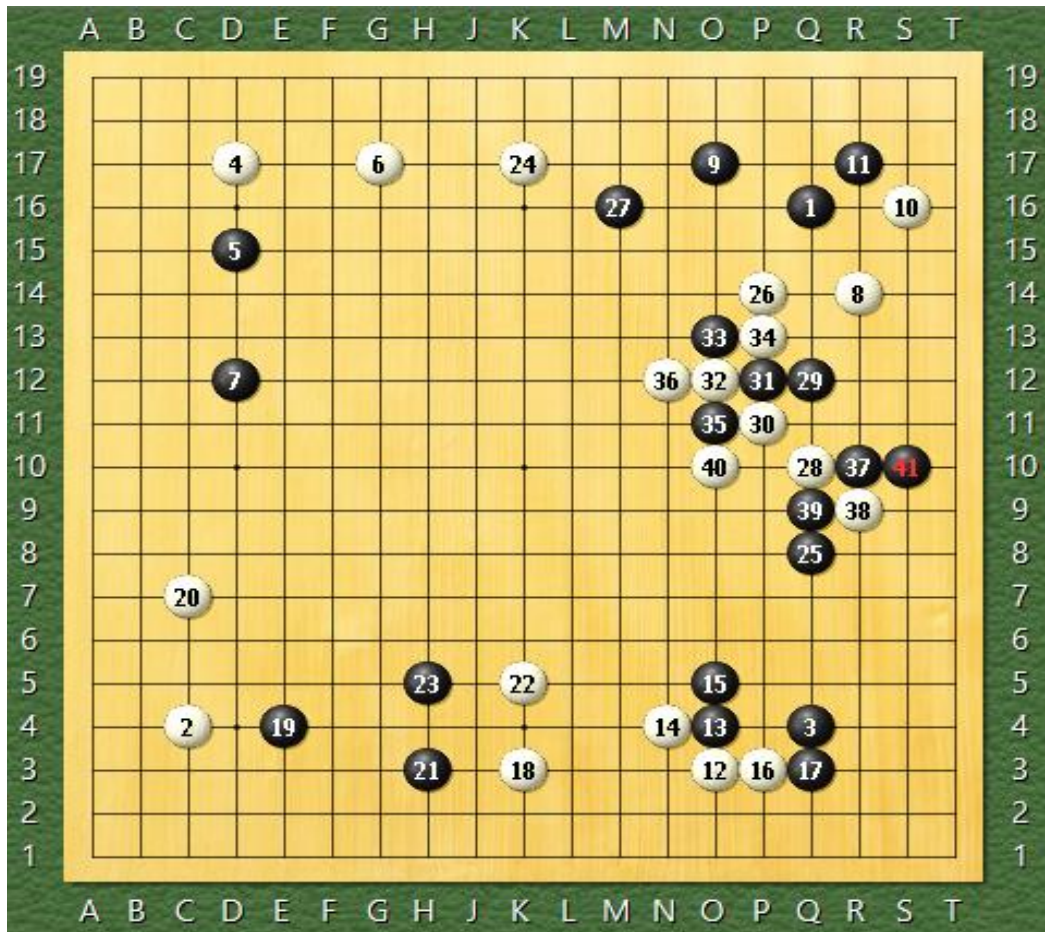
帰りの車中でいろいろ検討したが白30はこの一手。右辺黒29の打ち込みで激しい戦いが始まった。



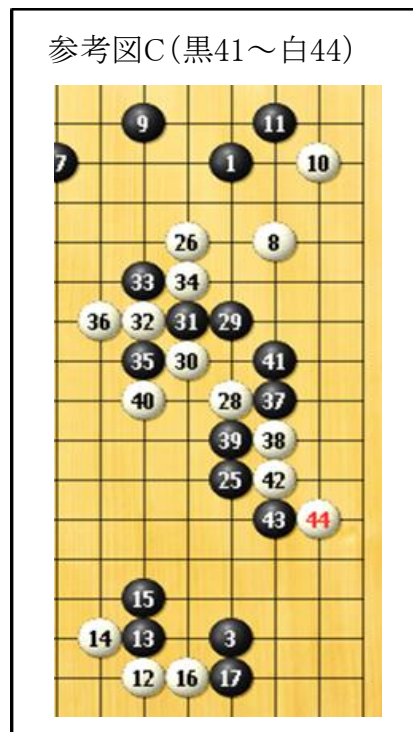
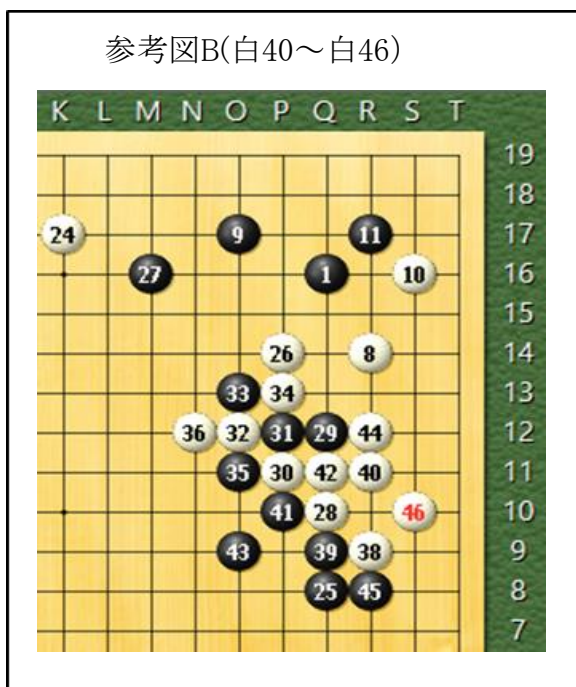
参考図A

白20以下白34までが相場で白はここから戦端を開いた方が楽だったのでは

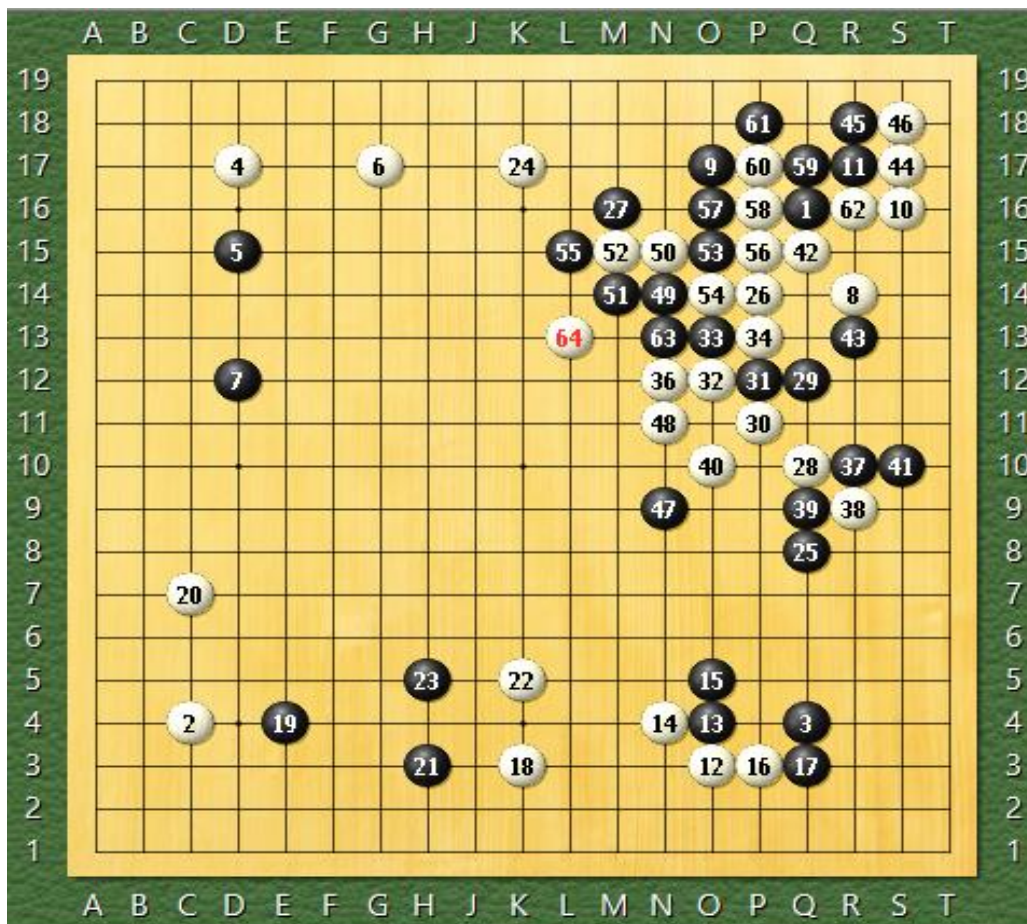
(2) 黒31～黒41



白40は黒37の上へハネ出す手が円満な手。参考図B 白40～白46まで黒は41から43にかけておけば不満はない。次に黒45の押えも先手。実戦は白40に黒は長考の末黒41と下がった。これが村田名人をうならせた絶妙手。本来捨て石にすべき黒29、31、37が生還し、右辺の白地を大きくえぐりながら30目近い黒地を確定させた。他に参考図Cの黒41と引く手も考えられるが、白42と動き出されてうるさくなりそうだ。

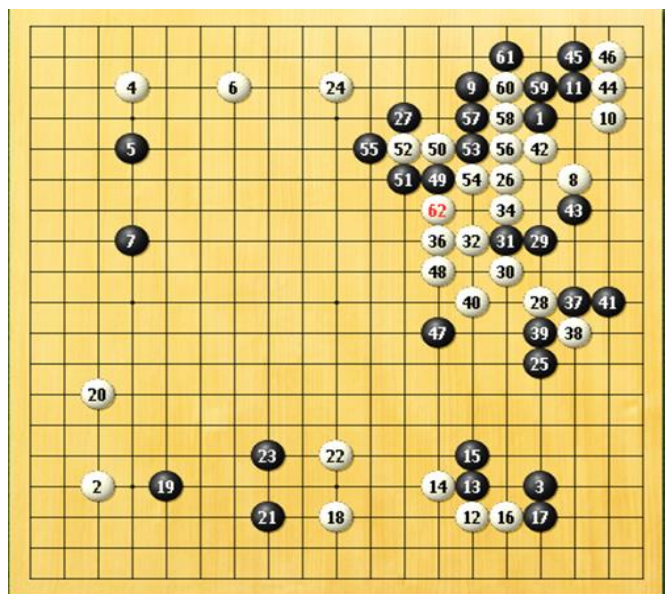


(3) 白42～白64

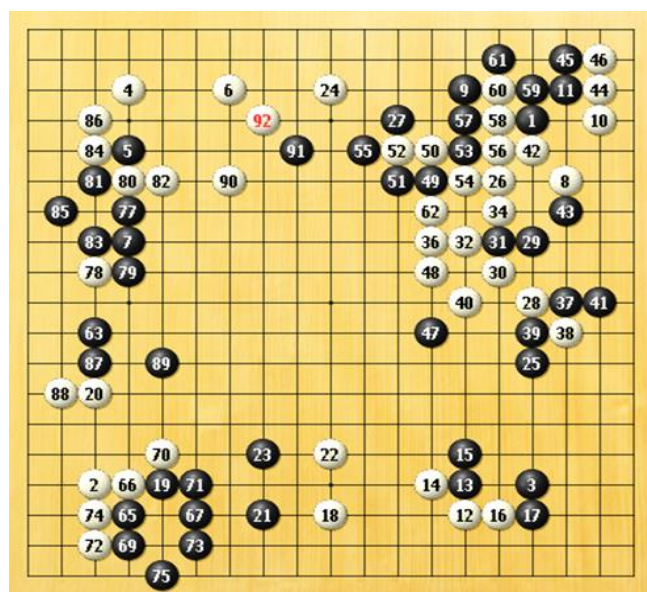


黒に63と継がれては苦しい。
 白62で黒33の石をポン抜いておけば、下辺や左辺の黒石に寄り付く楽しみを残せたのだが。
 参考図Cの白62の後、参考図Dの黒63と大場に廻られても、仮に白92までの流れならコミにかか
 かる形勢になっている。

参考図D

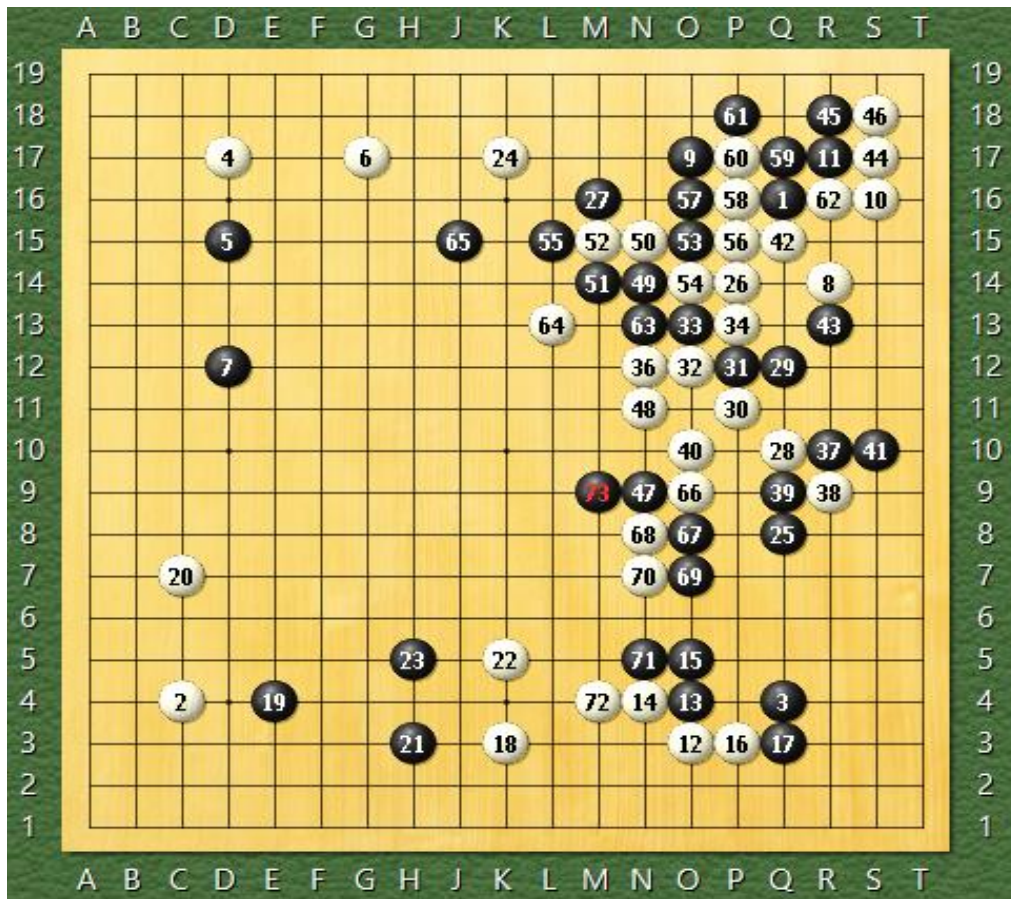


参考図E (黒63～白92)



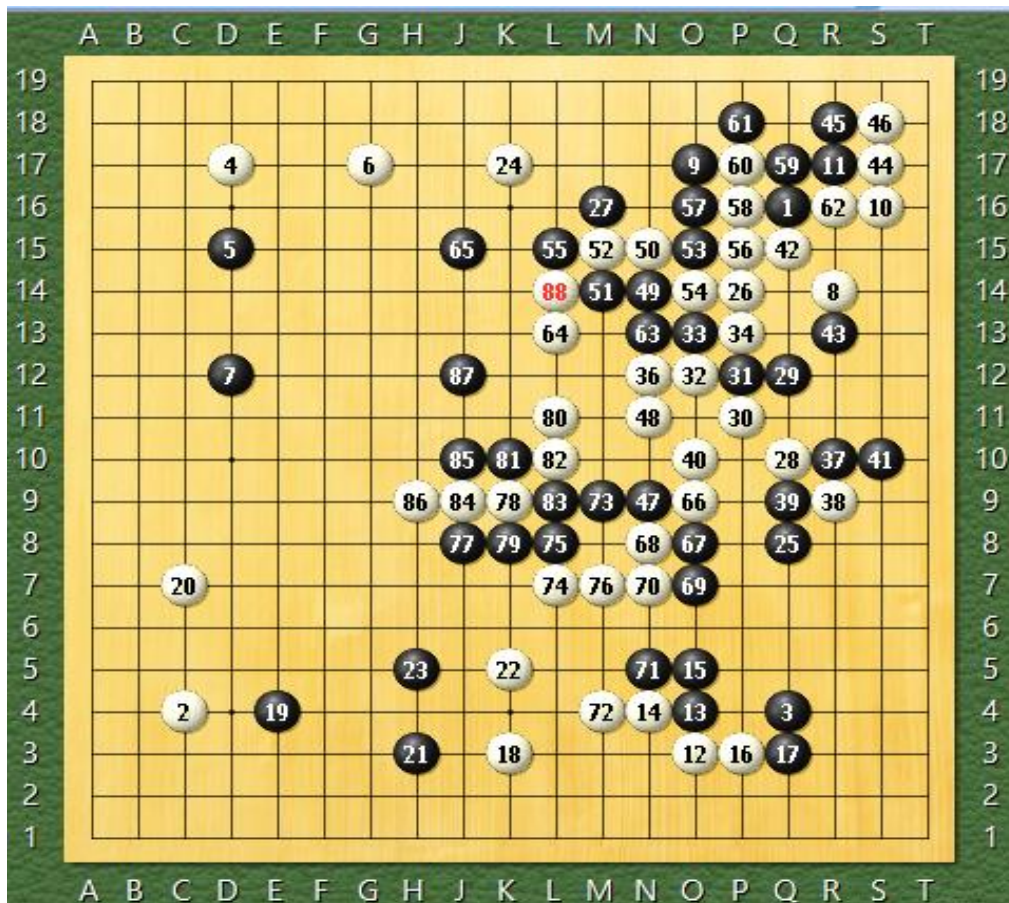
白64(黒65の右)、白66(黒69の右)
 白76(黒85の右)

(4) 黒65～黒73



黒65は左辺の石に手を伸ばしながら、中央の白の集団を大きく包み込む好点。しかも上辺の黒石の守りにもなっている。白は66から68と切った後、黒69に白70と打った手が悪手となってしまった。黒は47の石をすぐに動かさず、冷静に71と押して白72と受けさせた後に黒73と動き出した。71の押しは白からも打ちたい場所。白70を打った為に手なりで黒70を打たせてしまった。結局、黒に73と伸びられて黒は分断されてしまった。前譜でも述べたようにここは早く収まって、左辺及び下辺の黒に寄り付きたいところ。白は70で73と黒47の石を抱えておけば、一団の白石が安定していた。

(5) 白74～白88

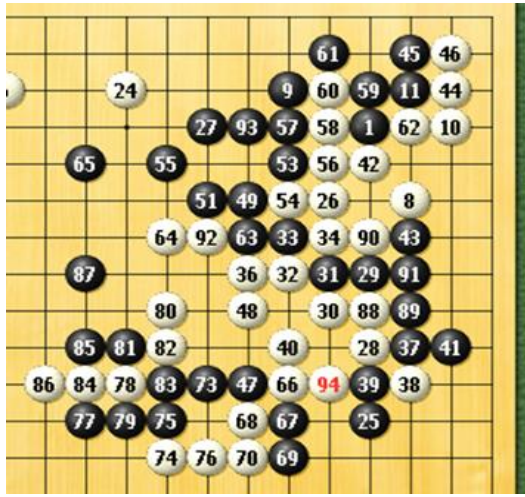


白76のつながは一路下へかけつぐ方が働いている。将来、討手返しの形が残るのを嫌ったものと思われるが、下辺との連絡を確実にし、後の流れ次第で黒23と77の間を強引に割いて出る手が残せる。白74から白86までは打つ度に優劣が変わるような激しい戦い。

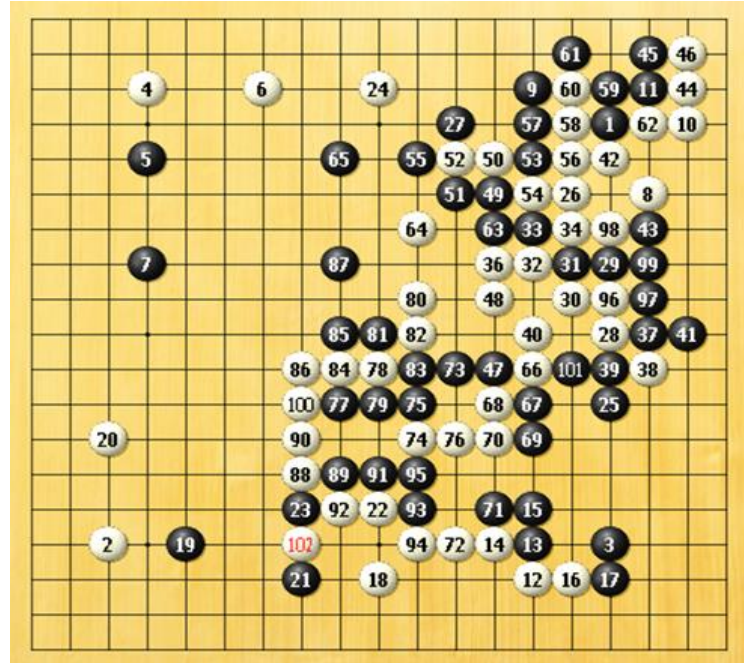
しかし、黒87で中団のの石が窮屈になってきた。

ここは参考図Fの白88から白94まで、右上と共に白石のイキを確定しておく方が良かったのではないか。中央の白の3子が上下の黒石を狙って暴れだせば、まだまだ面白い。

参考図F(白88～白94)



参考図G(白88～白102)



白88は参考図Gの黒23につけのが最後の勝負手。

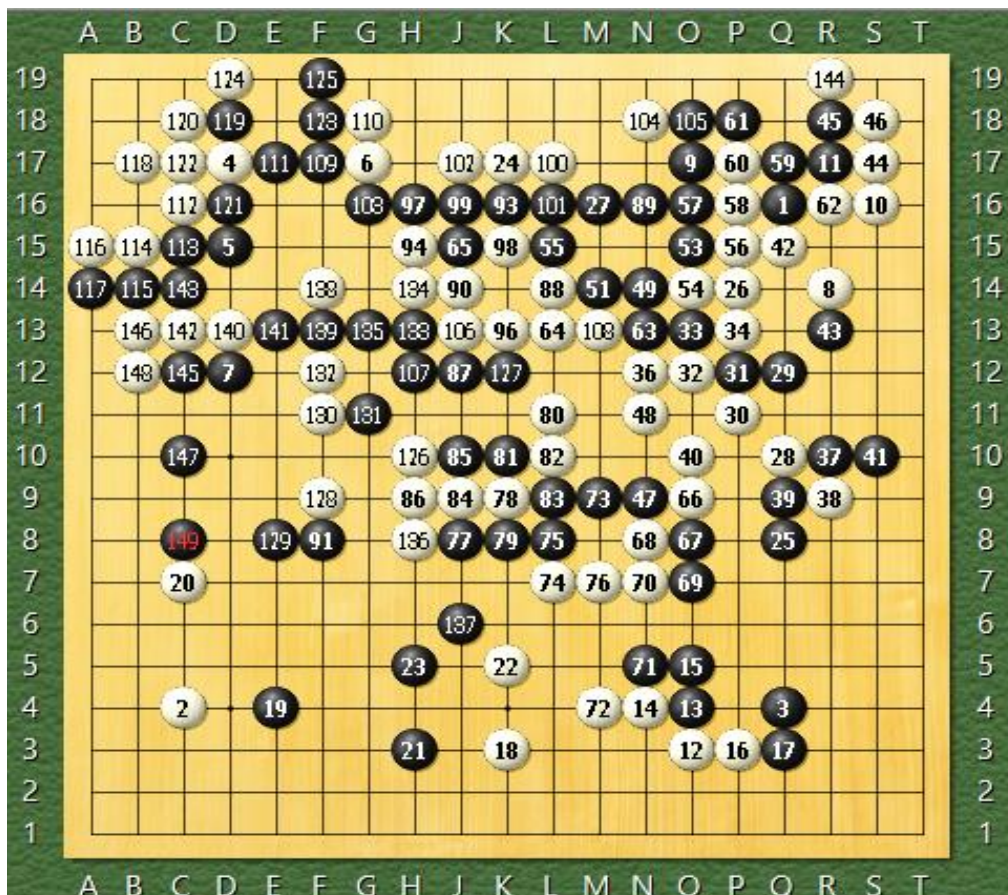
左図は一例だが白88～白102まで。

中央の石を捨てても白102となれば

左下ほぼ1/4のスペースををそっくり呑み込んで、白も面白い。

白88に黒が89とはねて来た時、92とすぐに切り違えずに90と伸びる手順。すぐに切り違えると黒90からずっと左に押されて手にならない。

(6) 黒89～黒149 (最終譜)



(最後は手順のみ)

白は90から上下の石を裂いて出ようと試みたが黒に手厚く受けられ不発に終わった。

上辺の黒も白104の石が人質になっているのでイザとなれば生きることが出来る。

白140はピタッと141に打つべきではないかと思われたが、どのみち中の黒9子とは攻め合いにはならない。押える前に黒109か黒111の下から覗いておいて補強する手も検討したが結局、ここを切っても上辺の黒は死なないのできいてもらえない。

この後、数手打って黒の中押し勝ちとなった。

多少の力の差は、長いブランクがハンデとなるはずで絶対不利だろうと観戦者達は皆口には出さないが北村さんにエールを送っていたはずだが、所々で長考するものの手厚い着手でまず弱点を補い、それから攻撃に転じる手順で押し切り、快勝した。

この展開に観戦者はいつの間にか白に肩入れしており、心の中で応援したが、時既に遅し。

と言う訳で解説文も白に偏ったものとなってしまったことをお許し願いたい。

